室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

# 直喩文の構造と機能



| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: 室蘭工業大学 |
| | 公開日: 2014-03-14 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 橋本, 邦彦 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/2817 |

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

# 直喩文の構造と機能

| | |
|---|---|
| その他（別言語等）のタイトル | The Structure and Function of Simile Sentences |
| 著者 | 橋本　邦彦 |
| 雑誌名 | 室蘭工業大学研究報告．文科編 |
| 巻 | 34 |
| ページ | 65-87 |
| 発行年 | 1984-11-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/2817 |

# 直喩文の構造と機能

橋　本　邦　彦

# The Structure and Function of Simile Sentences

Kunihiko HASHIMOTO

**Abstract**

The aim of the present article is to clarify the structure and function of simile sentences. The structure consists of a topic element, a focus element, a simile element and a mark of subjectivity, and the first three elements make a certain relation of hierarchy. The function is defined as the reciprocal action of these elements, that is, "the predication bound by the modification". Through the above argument, the popular claim that the function of similes is comparison of similarities is rejected as an inadequate one.

## 1. は　じ　め　に

直喩文の基本形は，３つの要素から成る。

(1)　A Verb (C) LIKE/AS B[1].

A，B，Cの各要素には，色々な名称がつけられているが，ここでは，Aを「主題要素（topic element）」，Bを「直喩要素（simile element）」，Cを「焦点要素（focus element）」と呼ぶことにしよう[2]。

直喩文には，Aの主題要素とBの直喩要素とは必要不可欠であるが，Cの焦点要素はなくてもよい。焦点要素を含む直喩文を「顕わな直喩文（overt simile sentence）」，含まない直喩文を「覆われた直喩文（covert simile sentence）」として区別することができる。

直喩文の機能は，一般に，主題要素と直喩要素との間の類似性の比較と考

えられている。たとえば，Beekman and Callow (1974：127) では，直喩文を次のように定義している。

(2) A simile is an explicit comparison in which one item of the comparison (topic element) carries a number of components of meaning of which usually only one is contextually relevant to and shared by the second item (simile element).

〈（　）及び下線は筆者による。〉

比較が直喩文の中心的な機能であるならば，3つの要素の作用の仕方は，最初に主題要素と直喩要素とが同一平面上に並置され，結び合わされ，次に双方の結合点となる焦点要素に方向づけられる，ということになる。これを図示すると，次のようになる。

(3) 〔A#B〕⟶C

〈Aは主題要素，Bは直喩要素，Cは焦点要素，#は並置による結合，〔……〕は結合の領域，⟶は結合の方向を示す〉

本稿の主な目的は，このような類似性の比較という直喩文の機能の把え方を具体例をあげて再検討し，その問題点を指摘し，代案を提示することにある。

## 2．類似性の比較をめぐる問題点

(4) My brother is tall as a giraffe.

「類似点の共有に基づく比較」という定義に従って分析すると，"my brother" と "giraffe" とは，〔+tall〕という意味特性 (semantic features) を共有していると考えられる。問題は，この意味特性の認定をめぐって生じてくる[3]。普通名詞 "giraffe" の意味特性の中には，固有に〔+tall〕が含まれているかもしれないが，特定の指示対象を示す "my brother" には，この特性は，固有には含まれていない。

文(4)のように，特定の指示対象を示す名詞と一般的な指示対象（たとえば，「種 (species)」）を示す名詞との，この順序での結び付きは，直喩文では普通に観察できるものである[4]。

(5) a. His clothes were white as snow. (Matthews 28 : 4)
b. My throat is as dry as dust. (Psalms 22 : 14)
c. They are as tall as a tree and as big round as a church. (Huckleberry Finn)[5]

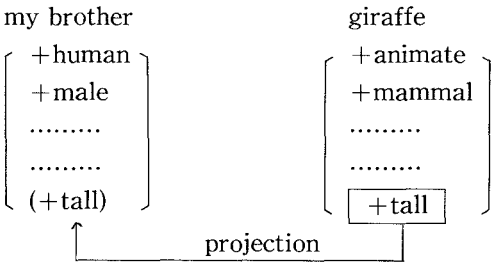
(5)の各文からわかるように，主部の位置に立つ名詞は，文脈により特定化できるものが多いのに対し，述部の直喩要素である名詞は，それ自体で特定化できるのである。

では，文(4)の共通の意味特性と目される〔+tall〕は，"my brother" へとどのようにしてもたらされるのであろうか。Miller (1979) は，直喩要素の意味特性が主題要素へ移行することにより，類似性の比較が成立すると主張する。

(6) Before the referent (=topic element) of a simile is added to the image, certain features are transferred to it from its relatum (= simile element)[6]. (p. 221) 〈（　）は筆者による。〉

これによると，文(4)の意味特性〔+tall〕は，次のような形で移行することになる。

(7)




移行により直喩要素の意味特性が失なわれることを避けるために，「移行」を「映写 (projection)」という概念に置き換えるのが適切であろう。こうすれば，主題要素に新たに意味特性が付加される一方，直喩要素の当該の意味特性も手つかずのまま残されることになる。

(8) 意味特性映写規約 (The Projection Convention of Semantic Feature (s))

類似性の比較を成立させるために，直喩要素の意味特性を一定の数だけ主題要素の意味特性行列（matrix of semantic features）に映写せよ。

この説明の仕方には，しかしながら，次の三つの問題点がある。

第1の問題点は，文法的主語をもたない直喩文の場合に生じる。

(9) a. Don't stupid like a horse or a mule. (Psalms 32 : 9)
b. Be as subtle as serpents and as guileless as doven. (Matthews 10 : 16)

類似性の比較を成立させるためには，（9 a）では，直喩要素 "horse", "mule" の意味特性〔+stupid〕を，（9 b）では，"serpents" の意味特性〔+subtle〕と "dove" の〔+guileless〕を，それぞれ主題要素に映写しなければならない。けれども，映写を被るはずの主題要素は，文法上は存在していない[7]。

第2の問題点は，直喩要素の意味特性自体にかかわっている。

(10) if you have faith as big as a mustard seed (Matthews 17 : 20)

もし直喩要素 "mustard seed" から主題要素 "you" へ意味特性が映写されるのであれば，それは〔+small〕でなければならない。なぜなら，〔+small〕こそが，"mustard seed" の固有の意味特性だからである。ところが，実際に文(10)の直喩文を成立させている意味特性は〔+big〕である。いったい直喩要素は，この相矛盾する意味特性を，どこから引き出してきたのであろうか。

さらに，次の文に目を転じていただきたい。

(11) a. The present minister of Japan was drunk like a parson yesterday.
b. The motor which our old professor invented is useless like a headache.

直喩要素が固有に持つ意味特性は，概ね，次に列挙するようなものであろう。

(12) a. parson

| |
|---|
| +human |
| …… |
| +professional |
| +Christianity |
| +Church of England |
| …… |

b. headache

| |
|---|
| +physiological |
| +sick |
| +painful |
| …… |
| +part of head |
| …… |

この意味特性行列から，映写される意味特性〔+drunk〕と〔+useless〕をそれぞれ予測することは難しい。その理由は，これらの意味特性は，少くとも，"parson" や "headache" の第一義的な意味を構成してはいないからである。もし，意味特性の移行もしくは映写にこだわるのであれば，(11)の各文の直喩要素には，主題要素に付与すべき共有特性が含まれていないことになり，類似性の比較も成立しないことになる[8]。

以上2つの問題点が解決されない限り，Miller (1979) の意味特性移行理論，あるいは，その修正案の意味特性映写理論は，主題要素と直喩要素とに共有特性を妥当なやり方で結び付けることはできないのである。

文(4)に戻ると，"my brother" に付与される〔+tall〕は，述部の焦点要素により叙述されることによって初めて明らかになることに気がつく。

(13) My brother is tall.

つまり，意味特性〔+tall〕のあり方が，主題要素と直喩要素との間で異なるのである。主題要素 "my brother" は述部により叙述されることで認定されるが，直喩要素 "giraffe" の方は，語彙特性という面から単独で認定されるのである。したがって，(3)のように，直喩文の機能を類似性の比較に求めるという考えには，不備な点があると言わざるを得ない。

第3の問題点は，動作，過程，状態等を表わす記述的な動詞を述語にもつ直喩文に生じる。このような直喩文では，共通の意味特性を明示してくれる焦点要素をもたない傾向がある。

(14) a. He protects me like a shield. (Psalms 18 : 2)
b. They swarmed around me like bess. (Psalms 18 : 10)

これは，動詞自体の含む意味特性が，直喩要素の意味特性と呼応して，新たに意味特性を指定する焦点要素の導入の必要性を排除しているからであるように思われる。

たとえば，(14 a) では，動詞 "protect" の含意する〔+safe〕，〔+reliable〕等の意味特性が，"shield" の有する同じ類の意味特性と呼応しているのである。したがって，"in safety" のような焦点要素を加えて，あえて冗長な表現をとる必要性はないのである。いわば，述語動詞が焦点要素の役割を代行していると考えてよいだろう。これに反して，主題要素 "he" と述語動詞 "protect" との間には，こうした意味特性の呼応関係は成立しない。

(14 b) でも，"swarm" の含意する〔+noisy〕，〔+numerous〕等と "bees" の有する意味特性とが呼応し合っているのに対し，"they" と "swarm" の方には，このような呼応関係は存在していない[9]。

## 3．直喩文の機能

上記から導き出せる事柄は，次の通りである。

主題要素と直喩要素との類似性の比較という点から直喩文の機能を把えるのは，全くの誤りではないにせよ，不適切である。直喩要素は，むしろ，同一述部内の要素との関係の方が，主題要素との関係よりも強い。普通の陳述文の場合と同様に，直喩文でも，主題要素が主語として述部によって叙述されていると考えるならば，直喩要素を含めた述部全体が1つの統一要素として主題要素を叙述していると考えることができる。

具体例を用いて説明してみよう。

(15) His hair was white as wool. (Revelation 1 : 14)

文(15)は，述部の焦点要素として形容詞 "white" を含む例である。まず，この文を主部と述部とに分ける。

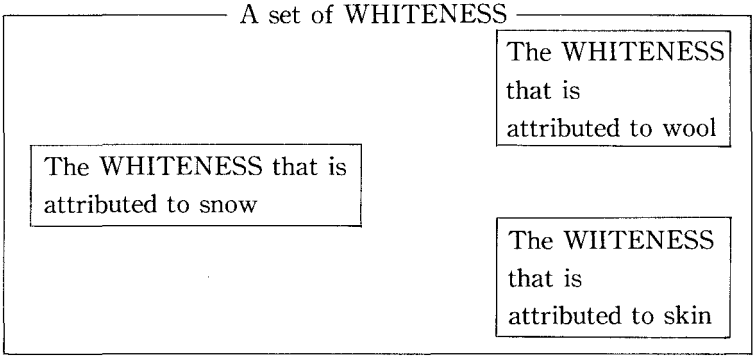
(16) 〔His hair〕 〔was white as wool〕[10]
Subj. Subj. Pred. pred.

直喩文で最初に注目されるのは，述部である。焦点要素 "white" の中心的

な特性を〔WHITENESS〕で示す。〔WHITENESS〕は，総称的・抽象的な性質の集合を示し，具体的な個体の特性の一部としてのみその存在を保証されている。

しばらくの間，"like" や "as" の機能を無視し，"white" と "wool" とを直結させて考えると，直喩要素 "wool" は，〔WHITENESS〕という総称的な特性の集合を "wool" の特性の〔WHITENESS〕によって限定していると考えることができる。すなわち，総称的な〔WHITENESS〕の帰属し得る対象（個体，もしくは個体の集合）を特定していると考えることができる。

(18)




総称的な〔WHITENESS〕は，たとえば，"snow"，"skin"，"rose" 等の個体/個体の集合に帰属する。言いかえれば，これらの個体/個体の集合から抽象された特性が，総称的な〔WHITENESS〕であるということになる。したがって，特定の対象を指定することは，総称的な〔WHITENESS〕の帰属先を限定するだけではなく，漠然とした抽象的な表示を明確な具体的な表示へと引き上げるのである。

ここで注意しておきたいのは，(15)の直喩文は「毛糸の白さ」について陳述しているのではなく，あくまでも「毛糸のような白さ」について陳述しているということである。「毛糸のように白い」と言うときに，それは主観的な視点から語られている。話者は，己れの抱くイメージや経験などにもとづいて，直喩要素 "wool" を選択するのである。それゆえ，直喩文に必須の "as" や "like" のような要素は，話者の直喩要素の選択の主観的判断を示す主観性

(subjectivity) の標識なのである。

これまでの内容をまとめると，直喩要素の機能は，同一述部内の焦点要素を限定するところにある，ということになる。これを図式化すると，次のようになる。

(19) 限定モデル（1）

$_{F}$〔Focus Element〕$_{F}$ $\xleftarrow{\text{LIKE (the mark of subjectivity)}}$ $_{S}$〔Simile Element〕$_{S}$

e. g. $_{F}$〔white〕$_{F}$ $\xleftarrow{\text{LIKE}}$ $_{S}$〔wool〕$_{S}$

(19)のモデルに対して，焦点要素が直喩要素の特性の1つを限定しているのであると，正反対の観点から考えることも可能である。

(20) 限定化のモデル（2）

$_{F}$〔Focus Element〕$_{F}$ $\xrightarrow{\text{LIKE}}$ $_{S}$〔Simile Element〕$_{S}$

e. g. $_{F}$〔white〕$_{F}$ $\xrightarrow{\text{LIKE}}$ $_{S}$〔wool〕$_{S}$

語彙項目 (lexical items) が意味特性の束からなると仮定する理論に拠るならば，"wool" を構成する複数の意味特性から，焦点要素の指定により，〔+white〕が選ばれるのである。

しかしながら，これまでの分析結果に加えて，少くとも次の3つの事実から，この種の考えは支持できないように思われる。

第1に，限定する要素を主語に，限定される要素を述語にとった場合の意味上の適格性の違いである。

(21) a. Wool is white. $\xrightarrow{\text{paraphrase}}$ The whiteness is attributed to wool.

b. *Whiteness is wooly. $\xrightarrow{\text{paraphrase}}$ *The wool is attributed to whiteness[11].

(21 a) のような平叙文は意味的に適格であるが，それは「白さ」が「毛糸」に帰せられるという帰属関係を成り立たせているからである。一方，(21 b) のような平叙文の意味的不適格さは，「毛糸」が「白さ」に帰せられるという帰属関係の不適格さによるのである。帰属関係は，限定の仕方（方向）を反映しているから，直喩要素の焦点要素への限定の方が，その逆の方向の限定よりも妥当である。

第 2 は，覆われた直喩文 (covert simile sentences) の場合である。この型の直喩文は，焦点要素の不在を特徴としている。

(22) His hair was as wool.

もし，限定作用が焦点要素から直喩要素へ至るのであれば，(22)のような文では，限定する要素が欠如することになる。反対に，直喩要素から焦点要素へ限定が及ぶのであれば，直喩文においては直喩要素はかならず存在していなければならないのだから，限定する要素の存在は確保されることになる。

(23) His hair was △ as wool.

(24) $\underset{F}{\langle\ \triangle\ \rangle}\ \underset{F}{\xleftarrow{\text{LIKE}}}\ \underset{S}{\langle \text{wool} \rangle}\ \underset{S}{}$

焦点要素に当たるダミー記号は，コンテキストとの関連から特定化されていくものと考えられる。

第 3 に，直喩表現から派生した複合語の形成の仕方は，「焦点要素—直喩要素」の順ではなく，「直喩要素—焦点要素」の順である。

(25) a. silent as stone ⟶ stone-silent（おし黙って）
b. deaf as stock ⟶ stock-deaf （かなつんぼの）
c. white as snow ⟶ snow-white （真白な）

英語の限定要素 (modifier) の限定の仕方は，一般に，「限定要素—被限定要素」の順である事実と(25)の各例を照らし合わせてみるならば，限定の方向は，直喩要素から焦点要素に及ぶと主張することができる。

以上のようにして，述部内で直喩要素が焦点要素を限定した後で，今度は，述部全体が主部を叙述する。

(26) 直喩文の限定と叙述のモデル

$$\text{Sub.}\ \overset{\text{〔}}{\text{T}}\ \text{〔Topic Element〕}\ \overset{\text{〕}}{\text{T}}\ \text{Subj.} \longleftarrow \text{Pred.}\ \overset{\text{〔}}{\text{F}}\ \text{〔Focus Element〕}\ \text{F}$$

$$\Longleftarrow \underset{\text{S}}{\text{〔Simile Element〕}}\ \underset{\text{S}}{\text{〕}}\ \text{Pred}^{12)}.$$

これを文(15)に適用すると，次のようになる。

(27) $$\text{Subj.}\ \overset{\text{〔}}{\text{T}}\ \text{〔His hair〕}\ \overset{\text{〕}}{\text{T}}\ \text{Subj.} \longleftarrow \text{Pred.}\ \overset{\text{〔}}{\text{F}}\ \text{〔white〕}\ \text{F} \Longleftarrow \underset{\text{S}}{\text{〔wool〕}}\ \underset{\text{S}}{\text{〕}}\ \text{Pred.}$$

(27)の作用の仕方は，(3)の作用の仕方と根本的に異なる。(3)では，最初に主題要素と直喩要素とが同一平面上に並置されていたのに対し，(27)では，最初に作用し合うのは直喩要素と焦点要素である。すなわち，(3)では，主題要素と直喩要素とが同じレベルで焦点要素に対するのにくらべ，(27)では，直喩要素と焦点要素とが同じレベルを構成して主題要素に対するのである。

直喩文では，焦点要素の直喩要素による限定という過程を経た後，両者が1つの統一要素として主部に当たる主題要素を叙述するのであれば，それは，非直喩文（平叙文）の叙述の仕方とどのような点で異なるのであろうか。

(28) a. His hair is white.
b. His hair is white as wool.

(28 a)の文は，非直喩文であるが，述部の "white" は叙述することによってはじめて，その帰属先の "his hair" を見出す。この場合の〔WHITENESS〕は，中立的/総称的である。文の意味する事実も，あくまでも客観的な視点から語られている。

一方，(28 b) は直喩文であるが，直喩要素 "wool" によって限定された "white" が "his hair" に帰属する。この場合の〔WHITENESS〕は，限定的/特称的である。文の意味する事実も，話者の主観的な視点から語られており，〔WHITENESS〕の限定化に関しては，他の選択項目の可能性を暗示している。"snow" の〔WHITENESS〕ではなく，また，"flower" の〔WHITENESS〕でもなく，ほかならぬ "wool" の〔WHITENESS〕であるというようにであ

る。

そのことは，(28)の各文に対応する否定文を作ることによって明らかにされる。

(29) a. His hair is not white.
b. His hair is not white as wool.

(29 a) では，述部全体が否定されており，たとえば，"but black (or red, brown, etc,)" が後続し得る。一方，(29 b) は，述部の一部，直喩標識プラス直喩要素の "as wool" だけが否定されており，たとえば，"but as snow (or flower, paper, etc.)" が後続し得る。

今まで展開してきた直喩文の機能とその作用の仕方を，記述的な動詞を述部に含む直喩文に適用してみる。

(30) a. I trample on them like mud in the street. (Psalms 19 : 42)
b. He waits in his hiding place like a lion. (Psalms 10 : 8)

述部が記述的な動詞を含むときに，焦点要素は，この動詞自体の内に暗示されている場合が多いと考えることができる[13]。したがって，直喩要素の限定作用は，直接に当の動詞に及ぶ。

まず，述部が取り出される。

(31) a. trample on them like mud in the street
b. waits in his hiding place like a lion

次に，述部の動詞と直喩要素との間に，限定の関係が成立する。

(32) a. $_{F}$〔trample on〕$_{F}$ ⟸ $_{S}$〔mud in the street〕$_{S}$

b. $_{F}$〔waits〕$_{F}$ ⟸ $_{S}$〔a lion〕$_{S}$

最後に，他の構成要素をも含めた述部全体が，主部を叙述する。

(33) a. $_{\text{Subj.}}$〔$_{T}$〔I〕$_{T}$〕$_{\text{Subj.}}$ ⟵ $_{\text{Pred.}}$〔〔$_{F}$〔trample on〕$_{F}$ them〕⟸ $_{S}$〔mud in the street〕$_{S}$〕$_{\text{Pred.}}$

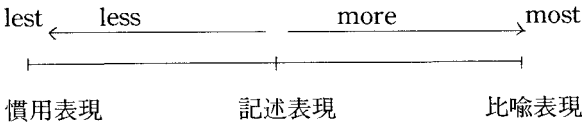
b. $\underset{\text{Subj.}}{\underset{T}{[}\underset{T}{[\text{He}]}\underset{T}{]}}\underset{\text{Subj.}}{} \longleftarrow \underset{\text{Pred.}}{}\underset{F}{[[}\underset{F}{[\text{waits}]}\underset{F}{\text{in his hiding place}]} \Longleftarrow \underset{S}{[}\underset{S}{[\text{a lion}]}\underset{S}{]}\underset{\text{Pred.}}{}$

## 4. ま と め

私たちは世界を把える際に，現にあるがままの物自体（Ding an sich）としての世界を把えているのではなく，知覚を通して経験された世界，精神によって無意識（非定立的意識）のうちに構成し直された世界を把えている。もっと言うなら，精神の網目に定位づけられた概念（concepts）としての世界を把えているのである。Jackendoff (1983) では，前者を「現実の世界 (real world)」，後者を「映写された世界（projected world）」と呼び，言語によって運ばれる情報は，映写された世界についてのものであると述べている（p. 29)。もしそうであるならば，世界の或る事態について語るときには，話者の視点/主観性というフィルターを通して把えられた事態を語ることになり，したがって，それに対応した言語表現（linguistic expressions）が選択されることになる。言語の含む文法や語彙項目自体は中立の状態に置かれているのであるが，それらがひとたび特定の事態を表示するために用いられるときには，それに対応した言語表現は，話者の視点/主観性の影響を直接的に被るのである。映写された世界の事態について語る言語表現は，話者の視点/主観性の枠内にある映写された世界に属するのであって，いわゆる客観的な現実の世界に属するのではないのである。

こうした言語表現自体には，おそらく，話者の視点/主観性の介入の顕著さの程度を示すハイアラーキーが存在するであろう。たとえば，あいさつのような決まりきった表現形式からメタファーのような創造的な表現形式に至るまでの間には，話者の視点/主観性の顕著さの度合を示す様々な段階が見出せるはずである。試みに，あいさつのような慣用表現を一方の端に，メタファーのような比喩表現をもう一方の端に置いて，次のような視点/主観性の顕著さを測る物さしを仮定してみよう。

(34) 視点/主観性の顕著さの物さし

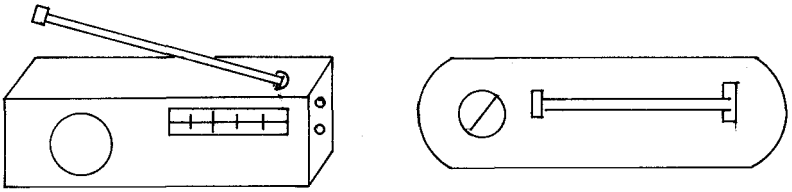



すべての言語表現は，この物さしのどこかに位置づけられる。但し，どこに位置づけられようとも，それは程度の差であって，この物さし自体は映写された世界に属し，したがって，話者の精神の内に存在するものなのであるから，視点/主観性の影響から免れることはない。たとえば，(34)の物さしの中央を占める記述表現に属する文を考えてみよう。

(35) a. This radio is square.
b. This radio is ellipsoidal, too.

(35)の各文は，"this radio" が同一物を指示するときに，互いに矛盾し合っているように思われる。どちらも，一見，客観的な視点から語られているからである。しかし，文(35 b)は，同じ物体を真上から見た場合には適切である。(35)の各文は，互いに矛盾し合っているのではなく，補い合っているのである。

(36) a. b.



これは，人間の知覚の様式に対応している。客観的な記述文であっても，映写された世界について語るという制約によって，視点/主観性(世界に対する話者の態度) を潜在させているのである。

(34)の物さしに照らしてみると，直喩文は比喩表現として右端に近い場所に位置づけられる。直喩文は，"as" や "like" といった主観性の標識により視点/主観性を明示しているのであるから，世界の事態の内容の記述というよりは，むしろ，その事態に対する話者の態度に特に焦点が当てられているように思

われる。それが，記述文ではなくて直喩文という視点/主観性の顕著さの強い表現形式を選ばせているのである。

先に，直喩文の機能を「限定による叙述」と規定した。もっと詳しく述べるならば，直喩要素の焦点要素への限定により主題要素を叙述するところに直喩文の本質的な機能が存在するとした。この限定による叙述を通して，主題要素の或る特定の側面がきわだたされるわけである。

(37) a. Her skin is white as snow.
b. Her skin is tender as snow.

たとえば，(37)の各文は，同じ対象について同じ直喩要素を用いて叙述しているが，主題要素のきわだたせられている側面，すなわち，視点/主観性の当てられている部分が異なっている。(37 a) では，"her skin" の色についてある種の価値/イメージ ("snow" によって限定された「白さ」) が付与されるのに対して，(27 b) では，"her skin" の感触についてある種の価値/イメージ ("snow" によって限定された「肌ざわり」) が付与されている。この事実は，(35)の 2 つの文の間に成立する関係と等価の関係をもっているようにみえる。但し，(35)と(37)の文の相違は，前者では視点/主観性が潜在化しているのに対して，後者ではそれが顕在化している点にある。

直喩文が固有にもっている視点/主観性の「顕在性」が，従来のこの分野で唱えられてきた直喩文の機能，すなわち，「主題要素と直喩要素の類似性の比較」とか「類似性の比較による主題要素の強調」とかの源になっている。けれども，このような機能と思われてきたものは，「限定と叙述」という過程から生じる二次的な派生的効果にすぎないのであって，けして一次的な機能としてあげるべきではないのである。

直喩文の機能は，同一文内の基本的な 3 つの要素，主題要素，焦点要素，直喩要素のもつ各々の固有の役割を，「限定—叙述」という原理に従って動かすことにより初めて成立するのであって，いわば各要素の作用の全体を指すと規定するのがもっとも適切であろう。

## 付録　静態的な含意と動態的な含意

語彙は，一義的な意味を確定する意味特性（semantic features）と二義的な意味を確定する含意(connotations)とから成り立っていると仮定することができる。直喩文がどちらにより重要な役割を付与するかは，唯一的に指定できない。

(1) a. She's forty, and as tough and as sour as this bit of lemon-peel. (Thackeray : Book of Snobs)

b. He can be as obstinate as all the donkeys on Dartmoor when he pleases. (E. Phillpotts : Widecombe Fair[14])

文（1 a）の直喩要素 "lemon-peel" の意味特性に〔+tough, +sour〕が含まれているとするならば，この直喩文では，意味特性が重要な役割を演じていることになる。一方，文（1 b）の直喩要素 "donkey" の意味特性に〔+obstinate〕が含まれているかどうかについては，意見の分れるところであろう。〔OBSTINACY〕とは，主観的評価の色合いが強いからである。ここでは，含意が問題になってくる。

ある語彙に特定の連想が結びつく場合に，含意，あるいは含意的意味(connotative meanings）が問題になる。含意は，Crystal（1980）で次のように定義されている。

(2) A term used in semantics as part of a classification of types of meaning. Its main application is with reference to the emotional associations (personal or communal) which are suggested by, or are part of the meaning of linguistic unit, especially a lexical item.

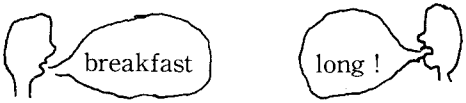
語彙が社会的・慣習的背景の中で，あるいは，個人の特有性に支えられて，特定の連想と結びつくときに，その語彙は含意をもつのである。確かに，含意は，語彙の弁別的価値を決定する意味の一部分ではないにせよ，その語彙が，語る人間にとっていかなる相対的価値を有しているのかを測る標識となる。

(3) a. His face is brown like coffee-berry.

b. His face is long like breakfast.

文(3 a)は，"coffee-berry"を構成する意味特性のうち，色を指定している。これは，客観的に指示できる特性である。他方，(3 b)は，"breakfast"という語彙によって惹き起こされる主観的な連想を示している。

(4)




この連想は，社会的なコンセンサスを得ている場合には，"breakfast"の含意的意味の一部分として，この語彙の内に沈澱しているのである。それが，直喩文の中で焦点要素としての資格を得ることによって，顕在化したといってよいだろう。

多くの直喩文では，このように，含意が中心的な役割を担う。含意は焦点要素として活性化されなければ，語彙の中に埋もれたままである。含意は，意味特性と同じく，語彙中に複数個存在し，比較的安定している。それは，当該の語彙がたどった歴史の所産であり，ある対象に対する人間の認識の投影である。

たとえば，次の文を見てみよう。

(5) a. My sister is innocent like bread.
b. The lady who Reagan met in the White House last night was naked like an egg.
c. My neighbor's wife is sweet-tempered like cream.

直喩要素"bread"の含意〔+innocent〕や，"egg"の含意〔+naked〕，"cream"の含意〔+sweet-tempered〕は，各々，当初はそれの指し示す対象からの連想とか印象から生じたにせよ，歴史を通して，一定の言語共同体内での合意の下に，安定したステイタスを得るに至ったのである。

このように，語彙が，その意味の一部分として持っている含意を「静態的含意 (static connotation)」と呼ぶことにしよう。

これに対して，含意が，焦点要素の指定によって初めて直喩要素に帰せられる場合がある。

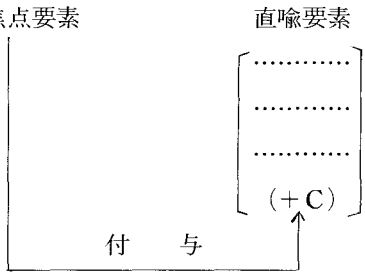
(6) a. Jesus Christ's teaching is profound as peanuts.
b. Hokkaido is cold like linguistics.

（6 a）の直喩要素 "peanuts" には，静態的含意として〔＋profound〕は存在していない。もちろん，それは意味特性の構成員でもない。けれども，"profound" が焦点要素として指定されることによって，"peanuts" はかつて所有したことのない含意を受け取るのであり，それと同時に，他の何かのではなく，まさに "peanuts" の〔PROFOUNDNESS〕を限定し確定するのである。（6 b）についても，同様の説明が適用される。

新しい含意の付与は，直喩標識 "like" や "as" によって保証されている。なぜなら，直喩標識は主観性の標識として機能し，意味の範囲の拡張を許すからである。

新しい含意の付与は，焦点要素と直喩要素との間の，次のような相互作用によって成立する。

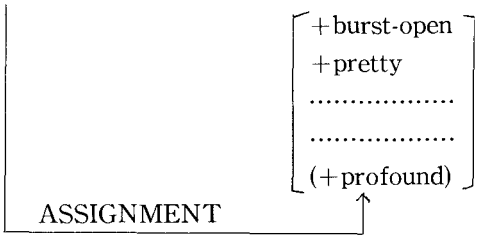
(7) C ← 限　定 — B
焦点要素　　直喩要素

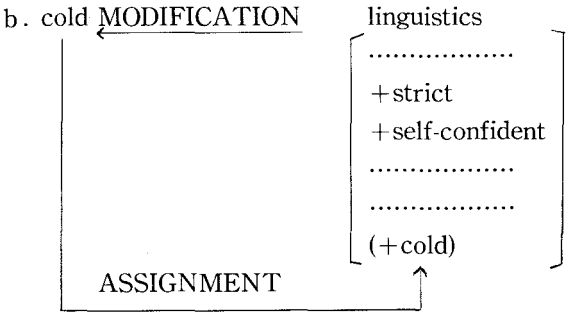



直喩要素Bがすでにもっている含意記載項目に，焦点要素Cによって指定された含意〔＋C〕が付与される。それと同時に，直喩要素Bは焦点要素Cを限定するのである。

この新しい含意の付与の方式を，(6)の各文に適用してみよう。

(8) a. profound ← MODIFICATION — peanut
〔＋small〕




直喩文は，直喩要素の潜在的含意を，焦点要素の限定作用によって顕在化させるにとどまらず，焦点要素の指定を通して，新しい含意を付与できるのである。後者を，前者の静態的含意に対して，動態的含意（dynamic connotation）と呼ぶことにする。動態的含意の生成は，焦点要素，直喩要素，直喩標識の3つの要素によって保証されるのであって，主題要素はこれに参与しない。

動態的含意は，矛盾を生じさせるような直喩文にも適用する。

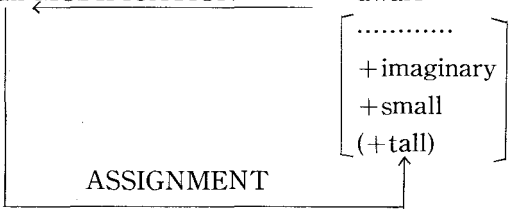
(9) a. Giant Baba is very tall like a dwarf.
　　b. Thacher is industrious as a sloth.

（9 a）の文では，焦点要素 "tall" と直喩要素 "dwarf" とが，互いに相容れない関係にあるように思われる。少くとも，"dwarf" は，一般的な認識に立って判断するならば，けして "tall" ではないからである。

では，（9 a）の文は，不成功な直喩文なのであろうか。この問いには，否定的に答えることができる。直喩要素 "dwarf" は，"tall" を限定しているからである。

相矛盾する要素を含む直喩文に，(7)の方式を適用すると，次のようになる。

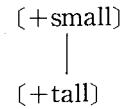
(10) tall MODIFICATION　　dwarf




ここで問題になるのは，直喩要素においてすでに記載されている意味特性，もしくは静態的含意の〔+small〕と，新たに付与された〔+tall〕とが衝突を起こすのではないかということである。

これについては，既存の意味特性，もしくは含意は，新出の含意より優位なステイタスを有すると考えることができる。すなわち，新たに付与された含意が，既存の意味特性，もしくは含意と衝突する場合，新出の含意は，既存の意味特性，もしくは含意に従属するのである。

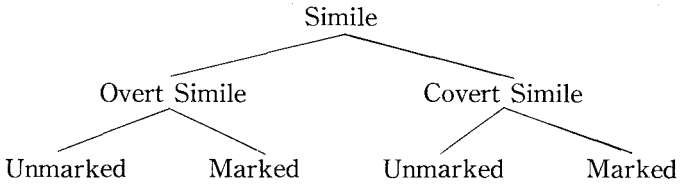
(11)




これにより，焦点要素 "tall" は，特別な意味を帯びることになる。"tall like a dwarf" と叙述された主題要素 "Giant Baba" は，ある種の特有性を秘めた背の高さをもつに至るのである。もし，〔+tall〕の付与により〔+small〕が削除されると考えるならば，今述べたような効果は期待できないであろう。(9 b) についても全く同様の説明ができる。

以上で論じてきた事実を踏まえて直喩文を分類すると，次のような図式を得ることができる。

(12) 含意にもとづく直喩文の分類



| Simile (Static Connotation) | Simile (Dynamic Connotation) | Simile (Static Connotation) | Simile (Dynamic Connotation[15]) |
|---|---|---|---|

（註）

1）Cの括弧は，この要素が任意であることを示す。尚，"as～as" を用いる直喩文と同じ句を用いる比較文との間には，統語上の相違が見られる。第1の相違は，直喩文では "as～as" の最初の "as" を省略することができるが，比較文では，それができない。

i），ii）とも，aが直喩文，bが比較文である。

i）a. My brother is as tall as a giraffe.
　　My brother is　tall as a giraffe.
　b. My brother is as tall as I.
　　*My brother is　tall as I.

第2の相違は，直喩文では "as" 以降に助動詞を残すことはできないが，比較文では残すことができる。

ii）a. *My brother is as tall as a giraffe is.
　b. My brother is as tall as I am.

2）Beekman and Callow (1974) は，Aを "topic"，Bを "image"，Cを "point of similarity" と名づけている。また，Miller (1979) の術語では，Aは "referent"，Bは "relatum"，Cは "relation of similarity" である。いずれの名称にしろ，直喩文の機能の把え方の一端を垣間見させてくれる。特に，Cの名称に注目のこと。

3）(2)の引用文を見ておわかりのように，Beekman and Callow (1974) では，「意味特性」ではなく「意味成分 (component of meaning)」という術語を用いている。本稿では，両者に対する価値評価はいっさいせず，以下の議論との一貫性をもたせるために，「意味特性」の方を唯一的に採用する。

4）主語の位置に一般的な指示対象を示す名詞が立つと，直喩文ではなく，文字通りの比較文になり易い。

i）a. A demon's face is as red as fire.
　　（悪魔の顔というのは火のように赤いものだ。）
　b. That demon's face is as red as fire.
　　（あの悪魔の顔は火のように赤い。）

aでは，"demon's face" と "fire" とは，〔+red〕という共有の意味特性を介しての比較の色合いが強く，他方，bでは，特定の "demon's face" に対する直喩要素として "fire" が用いられている。文のこうした結び付きにおける順序は，もちろん，直喩文にだけ起こる現象ではない。たとえば，リクール (1981：108) は，言語の機能を「個別化機能」と「述語機能」とに分けて，次のように論じている。

ii）言語は一方では名ざされた個体に根ざしながら，他方では質，類，関係，行動など，

原則として普遍的なものを述語する。言語はこうした二つの機能の非対称性を基盤にして働くのである。

5）この例文は，スヴァルテングレン著/佐々木達訳『強意的直喩の研究』(p. 15)から引用した。

6）Miller (1979) の術語に関しては，註2を参照のこと。尚，各々の要素に関して，次のように定義している。

the relatum is old information, the referent is the current topic, and the relation of similarity between them is new information. (p. 218)

7）もちろん，命令文は，語用論的観点をとるならば，Speaker-Addressee の関係の上に成立するものであるから，主題要素に "you" を想定することができる。しかしながら，隠れた，あるいは深層の "you" に規約(8)を適用することは，この形式の文にだけ特別の条項を施すことになり，一般性に欠けるという欠点を免れない。このことは，同じ命令文でありながら，意味特性が隠れた "you" にではなく，文法的な目的語に映写される例によって増幅される。

a. Don't make him eat as a cormorant.

b. Let their love be ever so strong as glue.

8）「意味特性」の枠を一義的な意味から二義的な意味までも含み得るように拡大することも可能である。その場合には，「含意 (connotation)」が中心的な役割を演じることになる。"parson" には〔+drunk〕，"headache" には〔+useless〕という含意があるということで，類似性の比較を救うことができる。しかし，今度は含意の認定をめぐって新たな問題が生じてくる。含意には安定した慣習化した含意と不安定な慣習化していない含意とがある。いったいどの程度安定した含意を意味特性と同じレベルで扱うのか，また，どのようにして直喩要素から共有特性になり得る含意を指定するのか。結局，同じ映写でありながら，意味特性の映写と含意の映写とは性格を異にするのであり，別々の仕組みを考えなければならないだろう。但し，意味特性の移行は別にしても，直喩を考察する場合には，次のことを念頭に置いておく必要がある。すなわち，語の意味は意味特性と結び付き，語の価値は含意と結び付くということである。そして，直喩では，含意が大きな役割を担っていることは，否めない事実なのである。尚，これ以上の議論については，付録を参照のこと。

9）意味特性を指定する要素が存在する場合がある。

They will soon disapper like grass that dries up.

この文でも，焦点要素 "soon" は，"disapper" と "grass that dries up" の意味特性の呼応を，冗長的に繰り返しているか，強調しているか，明示化しているかの役割しか演じていないように思われる。

10）"Subj." と "Pred." はそれぞれ，"Subject" と "Predicate" の略である。

11）"woolly" が「ぼやけた」のような比喩的意味の場合には適格であるが，現在の議論とは無関係である。

12) "→" は叙述 (predication), "⇒" は限定 (modification) を表わす。

13) 動詞内部に焦点要素が暗示されている場合，当の焦点要素を唯一的に指定することの難しい事例が存在する。直喩要素と動詞との呼応関係というのは，双方の動的な相互作用，もしくは，一方から他方へと及ぶ作用による焦点要素の出現，もしくは成立と言いかえられるかもしれない。直喩文における焦点要素の出現/成立は，一顧の余地のある興味深い問題である。

14) これらの例文は，スヴァルテングレン著/佐々木達訳『強意的直喩の研究』(p. 14, 16) から引用した。

15) "Overt Simile" は，焦点要素の明示された直喩文を指し，"Covert Simile" は焦点要素が明示されない直喩文を指す。

a. Tom is strong like King Kong. (Overt Simile)

b. Tom is like King Kong. (Covert Simile)

(昭和 59 年 5 月 18 日 受理)

## 参 考 文 献

Abraham, W. (1975) "Zur linguistik der Metapher," Poetics 4 : 133−172.

Beekman, J. and J. Callow. (1974) Translating the Word of God. Zondervan Pub. House.

Bickerton, D. (1969) "Prolegomena to a Linguistic Theory of Metaphor," Foundations of Language 5 : 34−52.

Butters, R. R. (1969) "On the Interpretation of 'Deviant Utterances'," Journal of Linguistics 6 : 105−110.

van Dijk, T. A. (1975) "Formal Semantics of Metaphorical Discourse," Poetics 4 : 173−198.

Fowler, R. (1969) "On the Interpretation of "Nonsense Strings'," Journal of Linguistics 5 : 75−83.

Good News Bible. (1976) American Bible Society.

Jackendoff, R. (1983) Semantics and Cognition. MIT Press.

Loewenberg, I. (1975) "Identifying Metaphors," Foundations of Language 12 : 315−338.

Mack, D. (1975) "Metaphoring as Speech Act : Some Happiness Conditions for Implicit Similes and Simple Metaphors," Poetics 4 : 221−256.

Matthews, R. J. (1971) "Concerning a 'Linguistic Theory' of Metaphor," Foundations of Language 7 : 413−425.

Miller, G. A. (1979) "Images and Models, Similes and Metaphors," in Metaphor and Thought (ed. by Ortony, A). Cambridge Univ. Press.

Reddy, M. J. (1969) "A Semantic Approach to Metaphor," CLS : 240−251.

Reinhart, T. (1976) "On Understanding Poetic Metaphor," Poetics 5 : 383－402.
リクール，P. 著，久米博訳．(1981)「隠喩と言述の意味論」思想 No. 682 : 103－137.
スヴァルテングレン著，佐々木達訳．(1977)『強意的直喩の研究』研究社.
安井稔．(1978)『言外の意味』研究社.
Crystal, D. 1980. A First Dictionary of Linguistics and Phonetics. Andre Deutsch.